
疾風の剣

村元圭

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

疾風の剣

【Zマーク】

N7282G

【作者名】

村元圭

【あらすじ】

幕末の時代。水戸浪士安島慶四郎には暗い過去があつた、幼い頃より尊王讓位論を教えてきた彼は幕臣・勝海舟士佐浪士坂本龍馬との出会いによって日本に本当に必要なものを考え始める。薩摩藩長州藩彼を取り巻く流動的な時代に、慶四郎の出した答えとは…

京の街 その壱

時は幕末である。

京の街は浪人で溢れ、治安も乱れ騒乱としている。
勤皇の志士といいながら、強請、タカリをしている輩が多いのである。

「なあ、番頭さんよ、どうしても、この精忠浪士組
貸すのは嫌なのかい？」
芹沢は左手に持った鉄扇で番頭の頭を叩きながら言った。

「嫌とは、申してまへん、ちよと待つておくれやすと、お願ひして
おります。」

さすがに京でも、名の通つている両替商の越後屋の番頭である、毅
然と立ち振る舞つてゐる。

「なら、仕方ないな、実力行使といきましょつか？」
芹沢の声で、手下の4人が、一齊に暴れだした。

文中を蹴る者、簞笥をひっくり返す者、暖簾を捨てる者・・・

「堪忍や、堪忍しておくれやす・・・」
さすがの番頭も、これには、怖氣ずいた。

夜ではない、白昼の出来事である。

越後屋敷は立派で母屋と蔵が2つあり、三条通りに面した一辺が

15丈（約46メートル）以上もあり、野次馬も300人以上が集まり、中の様子を伺っていた。

「なんや、越後屋さんで、なんか、あつたんか？」

野次馬の後ろの方では、中の様子はわからない。

「また、強請らしいわ。災難やな、越後屋さんも・・・」

「壬生ボロの芹沢・・・なんとかつて悪党らしいで・・・」

野次馬たちは、口々にそんな会話をしながら、屋敷の入り口を取り囲んでいる。

「芹沢・・・まさか・・・」

野次馬の人波を搔き分け越後屋の屋敷の中に入つて行く若い武家風体の男がいた。

「あい、すみません、お通しください。」「お通しください。」

若い武家はそう言いながら、するりするり、と野次馬の間を抜け、屋敷の中へ入つて行つた。

屋敷の中は家具、帳面、花瓶、あらゆる物が散在している。

「おい！番頭！まだ、錢を貸さないって言うのか？」

芹沢が、番頭の胸ぐらを掴んで怒号している。

「待たれい！芹沢殿、私の顔に免じて、この場は去られては、いただけぬか？」

玄関口から若い武家風体の男が深々と頭を下げ礼をしながら言った。

「何やつだ？」

と振り返り、芹沢は若者の顔を見たと同時に驚いた。

鼻筋は高く、目は切れ長、それにこの品格・・・

「安島、安島慶四郎殿か？」芹沢は尋ねた。

「いかにも、慶四郎にござりますれば、何卒、この顔に免じてお立ち退きを・・・」

とまた深々と頭を下げた。

「貴殿、3年前、水戸藩を脱藩したのではないのか？」

芹沢は武家言葉で聞き返した。

「いかにも・・・」

「慶四郎殿がこの京に居られるとは、あの噂は誠であつたか・・・」

慶四郎は黙つてまだ、頭を下げていた。

「・・・」

芹沢の手下どもは刀の柄に一斉に手を置き、いつでも口火を切れる様に腰を落とし構えた。

「各々方！刀を抜いてはなりませんぞ！」

慶四郎は芹沢を凝視しながら叫んだ。

芹沢も手を刀に置いた。

「武士たる者、抜けば双方そうぽうどちらかが、死にいたるまで命めいを交える事になるが、それでもいいと、おうもいか？」
静かに慶四郎は言った。

張り詰めた空氣が流れた。

慶四郎と芹沢は睨み合つて居る・・・

芹沢は慶四郎の恐ろしいまでの劍氣を感じた。

「おぬし、この3年間で、何を見た？・・・」

「・・・」

剣豪と剣豪の対峙たいじはその場の空氣を静寂にする。
一瞬、時が止まつたかの様に見える、誰も動かない、いや、動けないのである。

「フフフ・・・」

芹沢が突然、狂喜に笑つた。

「わかりました、貴殿の顔を立ててこの場は去る事にしよう。」

芹沢は手下どもに田配せをした。

「安島殿、我々は脱藩の身、今回だけは元水戸藩のよしみとして、
引き下がりますが、次回は容赦はしませんぞ！」
と言い残して、静かに芹沢一派は去つていった。

屋敷の外では悪党一派が去つて行くのを見届けた野次馬たちが、歓喜に湧いている様だつた。

「いや、おおきー、お武家はん、おおきー。」

番頭は慶四郎に向手を仰させ拝んでいた。

「いやいや、礼にはあびませんよ。」

「お武家はんは、神様、仏様や～。」

番頭はまだ、拝んでいた。

「ところで、京ではこのような強請ますつは多いのですか？今朝、ここに着いたので京の情勢には疎うといのです。」

慶四郎が番頭に尋ねた。

「結構多いですわ、いつも御時勢じせいをつかい、こつもやつたりノラリクリリと返答してゐる間に相手も根負けして引き下がるんですが、芹沢つて奴はいきなり、暴力できよつた。ホンマの悪党ですわ・・・。」

「

「あー、すみません、あれでも元同藩の者たちですから、お許しください。」

「何をおっしゃませんや、お武家はんがいはつたから、助かりましたんやで・・・。」

「面おもて四よ郎ろう、おおきー。」

慶四郎は申し訳なさうと言つた。

「あ、やつや、なんぞ、お礼せんとなあ・・ちよつと待つておくれ
やす・・・」

やつと番頭は店の奥に引っ込んだ。

番頭が金子の包を持って戻った時には、あじまけいしゃく安島慶四郎の姿はなかつた。

京の街 その弐

慶四郎は三条から河原町を下っていた。

河原町通りは藩邸が立ち並んでいた。

（なるほど、この辺りは藩邸が多いので、さすがに浪人らしき者はいない）

「安島やーん！ 安島やーん！…」

慶四郎が後ろからの声に振り返ると、若い侍が走ってこちらに向かってくるのである。

歳のこころなり、慶四郎より一つ二つ年下だらつか…

「はつ はあ はあ～・・・私です、藤堂平助です
息を切らしながら、若い侍は名乗った。

「はて？どちらの藤堂殿ですか？」

「同門の江戸の千葉道場で・・・といつても私は玉ヶ池で、安島さんは桶町ですが・・・」

幕末に江戸三大道場 千葉周作の開いた玄武館（北進一刀流）、練兵館（神道無念流）、士学館（鏡新明智流）があった。

玄武館は、兄千葉周作の道場（玉ヶ池）と弟千葉貞吉の道場（桶町）、2つの道場があり、つまりは、平助は兄周作、慶四郎は弟貞吉の門弟もんていであった。

千葉貞吉は水戸藩の剣術指南を行つており、慶四郎も含む多くの水

戸藩士がこの道場に入門していた。

「そちらの桶町道場に出稽古した時に二三度お手わせしていただきましたが・・・やはり、覚えておられませんねえ・・・」
平助は残念そうに言つた。

「あい、すまぬ。藤堂殿・・・」

「いえいえ、安島さんはその頃すでに、免許皆伝の実力の持ち主、私なんか覚えているはずもありませんよ・・・あ、それから私のことは平助へいすけとお呼びください。千葉道場では安島さんは私の先輩であつたのですから」

「あい、わかつた、平助。」

慶四郎は平助をちらりと見た。

慶四郎は呼び捨てにする事に少し抵抗があつたが、平助の真剣な顔を見て素直に返答した。

「はあー はあ は」

呼吸を整え平助が話しを切り出した。

「失礼ながら、さつきの越後屋の件、見せせていただきました」

慶四郎は「お恥ずかしい」と口を・・・と足を先に進ませた。

平助も並んで歩きだした。

「あの芹沢せりざわつて人は我々の同志なんですが、時折、あの様に商人を脅し錢を巻き上げているみたいなんですよ。『迷惑だと思いますが、

「……」で会つたのも何かの縁と思つて相談にのつてもらえませんか？

「まあ、芹沢さんは元我が藩の藩士・・・兎に角話を聞きましょう」と曰ふく

慶四郎は京の情勢を知りたかった。

「事の始まりは、去年の事なんですが、庄内藩の郷士・清河八郎から將軍様の上洛に際して、將軍様警護の名目で浪士を募集があつたのです、私は江戸小石川の試衛館という道場の仲間たちと共に応募し、その他の浪士約200人と今年この京に入りました。」

「試衛館とは？あまり聞きなれない道場ですね？」

後の新撰組の母体となつた試衛館だが、この当時はただのオンボロ田舎道場でしかなかつた。無論、無名の道場であり、慶四郎も知るはずはなかつた。

「あい、すみませね、この道場は私の知人が門弟わたくしだった道場でして、その知人と共に道場に入りしているうちに、居心地がよくなりまして、すっかり、門弟のようになつてしまつた道場です」平助は仲間思いなのだと、楽しそうに答えた。

「ほお、平助が嬉しそうに答えるとこを見ると、いい道場でしょうね」

慶四郎は江戸から200名以上の浪士組がこの京に入つたことはすでに知つていたが、芹沢や平助がその浪士組の一員だとは思つても見なかつた。

「ところが、京に到着後、清河が勤王勢力と通じ、浪士組を天皇配下の兵力にしようとする画策が露見し清河の計画を阻止するために

我々浪士組は江戸に戻ることとなりました。しかし、私の所属する試衛館派と、芹沢さんを中心とする水戸派は、あくまでも將軍警護の為の京都残留を主張したのです」

「つまりは、清川八郎の策略で江戸から京に来て見れば、話が違うって事で、浪士組のほとんどは江戸に帰り、平助の試衛館一派と芹沢一派だけ京に残ったのか・・・」

「はい、当初は他にも残留組はいたのですが、今となつては、我々試衛館派と芹沢派しかいません」

平助は歩きながら話を続けた。

「今は京都守護職会津藩御預かりとなり、精忠浪士組となりましたが、ところが、会津藩からお給金が出ないので」

「なるほど、だから、芹沢一派は商人から錢を強請たかつているんだなあ」

慶四郎は思案した。

「京の街を不逞の浪士から守る為の精忠浪士組せいちゅうろうしそうが京の商人から錢を巻き上げてとは・・・笑い話にもなりません・・・今では壬生ボロとかミボロとか、京の人々に影口えいこう言われる有様で・・・どうしたものか・・・」

平助は困惑の表情で慶四郎を見た。

「そんな顔しないでください、芹沢さんの考えが正しければ、今に給金は出ますよ」

「え?・・・どういう事ですか?」

平助には全く理解できない。

「会津藩御預かりの浪士組が、京の街で給金が貰えない為、強請恐喝すると、会津藩の評判はガタ落ちになるだろ。つまり、会津藩は給金を払えないぐらい財政が悪いのかと悪評がたつからな、そんなことは藩主松平容保公がお許しになるはずがないですから」

「そんな、うまく行くのですかね？」

「出るは必ずです。給金が出る様になつてまだ、芹沢一派が強請夕カリをするなら、またその時考えればいいではないですか」

この後一月も経たないうちに精忠浪士組に会津藩から、給金は支払われるようになつた。

それと同時に新撰組と名を変えた。

京の街 その参

夕刻頃、慶四郎は寺町にある水福寺すいふくじと書つ寺に帰つて來た。

小さな寺で、本堂と離れの屋敷の一棟はなでお世辞ふたむねにも立派といえない寺であった。

寺門を潜り、本堂に行く石置を一つほど歩いたところで

「若さま、京の街はいかがでしたか？今、夕食の準備をしておりますので、奥でお休みくださいませ」

歳は三十中ほどせんじゅうじょうの和尚かがめが腰を屈めて慶四郎を出迎えた。

「和尚さま・・・若さまは、止めていただけないか・・・やれやれと言つた感じで慶四郎は呟いた。

「よこではありますんか、いひやつて対面するのも三年振りですぞ！」

和尚は大層たいそう、嬉しそうである。

離れ屋敷の前に猫の額ほど小さな庭があり、そこに花々が供えられた小さな墓碑ぼひがあった。

墓碑には一心達成 十八志士 と書かれている。

慶四郎はその墓碑に両手を合わせ、丁寧に拝んだ。

3月の初旬である。

固く閉ざされた桜のつぼみが西側からの夕日で真つ赤に染まつてい
る、それから、軒先の桶で足を洗い小さな屋敷に上がつた。

やがて、離れの6畳ほどの板間に夕食の用意もできあがり、慶四郎は膳の前に座った。

「おい　おい　和尚さま、魚とお酒があるではないですか？」

「今日は慶四郎さまと、再会できた特別な日ありますから」

「生臭坊主だなあ」

「まあまあ、まずは一献いつにん
和尚は御調子おちょうしを持ち、慶四郎にお酒を進めた。

慶四郎は一気に飲み干し、お猪口ちょこを下に向けて2・3度振り、和尚に返杯した。

「京の街は浪人が多くて、治安が悪くなっているのを、実感できましたかな？」

和尚はお酒を飲みほし言つた。

「なにやら、不逞ふていの浪士が多いようですね。ああ、そういえば、芹沢さんを見ました、三条の両替屋で相変わらず、錢を強請よきゆうつてしましました」

慶四郎は魚を箸で摘まみながら言つた。

「あの精忠浪士組の芹沢ですか？我が藩の恥ですな
和尚はホトホト困った様に言つた。

「もひ、芹沢さんは脱藩した方ですから、それにあの方は、あの方なりの考えがあるのでしょう」

「桜田門外の事件以来、我が藩の藩政も良くなり、私ももうすぐ、
帰参できるというのに、あの様な者が京の街で横暴してゐると思うと
虫睡むしづが走りますわい」

和尚はもう怒りをあらわにした。

この頃の藩政というのは、幕府の政策によつて口々口々変わつた。水戸藩では黒船来航以来、名君徳川斉昭が尊王攘夷を唱えていた。尊王攘夷 つまり、帝みかどを尊たつとび日本に入つて来ようとする異国人を打ち払うという考え方である。

しかし安政5年井伊直弼が幕府の大老になり、日米修好通商条約を独断で調印してしまい、これに異を唱える徳川斉昭は水戸での永蟄居を命じられることになる、いわゆる安政の大獄である。

こののち水戸藩政は幕府のいいなりになるが、これより3年前の安政7年桜田門外の変により井伊直弼は暗殺された。そして今 再び、藩政は尊王攘夷にもどりつつあつた。

「それはそうと、若様も私といつしょに帰参するのでしょうか？」
和尚は心配そうな顔である。

藩政は尊王攘夷派にもどりつつあつたので、藩は井伊直弼を批判して脱藩して浪人になつた藩史を呼び戻しているところだつた。

「いや、私は、もう少し自由な身でいたいのでこのまま浪人でいますよ」

漂々と慶四郎は答えた。

その答えに和尚は驚愕した。

「なんと！－！若様 いいですか！－！今、身に着けている羽織、袴、名刀桜十文字、いったい誰から頂いた物ですか？！毎日の金子！誰から頂いているのですか？！－！」

和尚はいつしょに慶四郎も帰参してくれると思つてたらしく、激しく慶四郎に詰め寄つた。

「兄上です・・・」

慶四郎は箸を置き、崩した足を正座に座りなおして静かに答えた。

慶四郎は浪人ではあるが、金子等の必要な物は藩にいる兄から、仕送りされていたのである。

「だつたら、なぜ、私といつしょに帰参して兄上の安島信義様の支えとなつて藩あじまたてねぎを盛り上げていこうとはしないのですか？亡き若様の父上 安島帶刀様あじまたてねぎに申し訳がないとは思わないのですか？！」
和尚は腹立たしいのか、もう涙目になりながら大声で言つた。

この時代の侍ならば、仕方ないのであらう、まずは藩が一番大事なのである。藩があつての自分なのである。まだ、日本人としての認識は皆無であつただろ。佐久間象山、勝海舟、坂本竜馬以外では。

「まあまあ、和尚様、いや海後磯磯之介さん・・・この事は兄上に
も、伯父上の戸田忠則様とだただのりもご承知されておる。ご安心を・・・」

慶四郎はこの事は他言したくはなかつたが、和尚に問い合わせられては仕方ないと想い、和尚を心から納得させる意味で、本名でつい話してしまつた。

「え・・・といふことは・・・」

和尚はしばらく考え込み、

「なるほど、家老の戸田様までご承知とは・・・つまり、若様は密使ひしの役を仰せつかつたのですなあ・・・」

和尚いや、海後は落ち着きを取り戻し、納得した表情で言つた。

その通りであった、慶四郎は藩から全国の情勢等の情報収集を任される事になっていたのである。

現在で言つところのスパイ活動のようなものではなく、水戸藩のこれまでの道を提言できるような情報収集である。暗躍している時代である、藩としても、世の中の情勢にすばやく対応したいのである。藩に在籍して活動するよりも、浪人として活動した方が情報は得やすいと説き伏せ、慶四郎が兄と伯父の許しを得てこのまま浪人で活動する事になった。

「これは、私の早合点はやがてんでした・・・まあ ほぼ 今まで通りということがありますなあ」

海後は落ち着きを取り戻していた。

「藩に戻るよりこのまま浪人の方がいろいろ都合がいいほうがありますので」

慶四郎はなだめるように言つた。

海後の言つた通りであつた、慶四郎は脱藩してから今まで兄の安島信義に自分の入手した情報を手紙で送つていた。

その時、寺門の方からズリズリと複数の草履の足音がした。

「はて? どなた様が来たのであらうか?」

海後は障子を開け、足音のする石畳の方を見た。
薄暗くてよく見えない。

「おおー! いや、やはり 偽坊主にせぼうずの海後の寺にいたのかー! ? 慶四郎は!」

足音の主はこちら側に向かつて叫んでいる。

「どこかで、聞き覚えのある声だが……」
と海後はつぶやいた。

「あはは・・・それはそうでしょう、あれの声は芹沢さんですよー」と慶四郎は平然と笑いながら海後に言った。

「昼間から誰かに付けられてましたから・・・あはは」

「え？？付けられてって・・・なんと・・・」
海後は嫌な顔をした。

やがて、庭の方から芹沢が屋敷に上がりこんで来た。

芹沢と慶四郎 その壱

「^{ヒサセ}偽坊主とは・・・おい、芹沢！屋敷に上がるなら、足ぐらい洗え！」

海後は面倒臭そうに大声で言った。

芹沢と海後はほとんど同じ歳であったので、お互い呼び捨てである。

芹沢 36歳 海後 35歳 であった。

「おお～ すまんの～ あまりにも嬉しくて、忘れとつたわい」

芹沢は昼間の顔とは別人の様にニコニコとしている。

海後の忠告に、素直に受け入れ軒先の桶で足を洗いだした。

「慶四郎様～ こんばんは～ 大変ご無沙汰しております」

芹沢の後の暗闇から3人ほどの男が顔を出した。

新見錦、平山五郎、野口健司であった。

この3人も昼間の越後屋で慶四郎と顔を会わしている。

「おまえら～ 海後はこいつこいつ」とこいつるやつからなあ～ 足洗つて上げれや！」

芹沢は上機嫌である、慶四郎に会えたのが嬉しかったのであらう。

後の3人も桶で足を洗いだした。

やがて4人は屋敷に上がりこんだ、ただでさえ狭い離れの板間は男女6人で更に狭くなつた。

「いや～ 慶四郎 昼間は驚いたぞ！ まさかお前がこの京にあるとは・・・」

芹沢は板間にあぐらをかきながら言った。

「芹澤さんこそ、相変わらずの暴れぶり……おまけに野口さんこそ私の後あとを付けさせるとは……」

「氣づいておられたか……」

まだどこに座わらうか迷つている野口は面目めんぼくなもやうに慶四郎に頭を下さげた。

「それにしても、お前の猿芝居いんしばゐなかなかだつたぞ!」

芹沢は早く新見らに座るよう手を拱こぶきながら言った。

「猿芝居いんしばゐではあつませんよ……大体……」

「まあまあほれ、酒も料理も持つて來たぞ」

芹澤は慶四郎の話を途中で遮さえぎつて、新見に早く酒の準備をするように目配せをした。

新見ら3人は酒樽3つと料理の入つているであろう御重箱ごじょうばこを2つ新見ら3人が抱えている。

新見は他の2人と手際よく、酒樽を開け、御重箱から料理を小皿にわけ始めた。

鯛、伊勢海老、御造り、煮物、まるでおせち料理の様な豪華なご馳走であった。

それから酒は酒樽から酒瓶に手際よく移された。

「それ、みんな座れ座れ!」

宴会準備は整つたと思つた芹沢は両手を上下しながら言った。

「おい、芹沢！　また、どこかで 強請おずつてきた錢で買つてきた酒であるつー。」

その様子を見ていた海後は、嫌悪感まるだしで言った。

芹沢の顔がムツツと歪んだ・・・

「まあまあ・・・」いはめでたい再開の場 飲みましょう「慶四郎が咄嗟とつかに場をないませると同時に海後の型を軽く叩いた。

慶四郎は海後に田で「まあ待て！」と優しく言つてこゝ。

「ほい 芹沢さん、どうぞ」「やあ

慶四郎は新見が用意してくれた杯さかすきを芹沢に持たせ酒を注いだ。

新見は結構 気がきく男だった、その間に全員に杯を持たせ酒を注ぎ始めた。

「ほれ 海後さんも どうぞ」

慶四郎は海後の持つた杯にも酒を注いだ。

海後は恐縮するように杯を持つている。

慶四郎は芹沢からも海後からもあえて酌しゃくをさせず、 新見から酒を注いでもらった。

自分に酌をする行為で2人がまた口論になる事を考えたのである。

一同に酒が注がれたのを確認して

「では、再開を祝して 乾杯！！」

芹沢が大きな声で叫んだ。

「乾杯！！」

海後だけは ふて腐れていた。

海後は芹沢の人の懐に土足でズケズケと入つてくるといじが昔から嫌いだつた。

一同、一気に酒を呑みほした。

「しかし、芹沢さんは今も昔も変わらないことしてますね」
慶四郎が話を切り出した。

実のところ慶四郎も芹沢の京での強請りタカリは良くないと思つている。

「それを言つなあ・・・慶四郎・・・わしは、ああいつ乱暴な事で
しか物事が進められん！」

芹沢はバツの悪そうな顔をした。

「おぬしは昔も天狗党一味で、藩内で強請りタカリをやつてたぞ！
同じ悪事をみかど帝のおられる京の都でもするとは・・・藩の恥さらしじ
や！」

海後が横から割つてはいった。

芹沢はこれより3年ほど前 天狗党（水戸の勤皇攘夷派）の前身で

ある玉造組で攘夷論者の活動の資金集めに恐喝まがいの行為で奔走していた。

「また、海後さん・・・そう あおらないでください・・・」

慶四郎は海後をなだめた。

「いいですか、芹沢さん 貴方あなたは今 精忠浪士組のお預かり藩の会津藩から給金をふんだくろうとして強請りタカリの恐喝まがいの事をしてるのはわかります」

芹沢は少し微笑んで話を聞いている。

「でも、不逞の浪士を取り締まるはずの精忠浪士組の筆頭局長が強請りタカリをしているのはいかがなものか?」

「わかつている・・・」

芹沢は小さな声で言つた。

「では、会津藩から給金がでた暁あがつきには金輪際こんりんざい京の商人から恐喝などせぬとお約束いたきたい・・・」

品格もあり優しげな話口調である。

昼間の越後屋とは明らかに違う、温和な空氣・・・静寂が少し流れた・・・

杯に残つたわずかな酒を飲み干し

「あい、わかつた・・・」

芹沢は目を閉じ納得したかの様に深く頭を縦に下げる。

「しかし、若、会津藩から給金が支払われるまでは、芹沢の乱暴な狼藉ろうせきは見て見ぬふりですか？」

芹沢のその態度を見て今までの懲罰うつばんが晴れたかの様に海後が尋ねた。

「いや、今日の様に私と出くわした時には、止めにはりますよ」

慶四郎は堂々と言った。

慶四郎に言われるまでもなく、芹沢は会津藩から給金を貰えれば商人から金を巻き上げるつもりはなつかった。

芹沢と慶四郎　その続

「今日の芹沢さん、こつもと 違うなあ・・・なんと言つか、人が丸くなつたて言つか・・・」

平山が新見に耳打ちした。

「やうだなあ、慶四郎様と会つとこつもこつも感じだなあ・・・」
新見は他の者に聞こえなじよつて小声で返答を返した。

「芹沢さんが慶四郎様の為にこつでも死ねると曰ひながら言つてゐ
からなあ」

芹沢と慶四郎がなにやら楽しげに話してゐるのを横田で見ながら平
山は言つた。

「なにやら、芹沢さんが、女房に尻に引かれた亭主の様に見えるな

「あははあはー まつたくだな」

新見と平山はこんな会話で楽しく酒を呑んでいた。

今日の昼間 越後屋からの強請りを慶四郎に阻止された後から芹沢
は変であつた。

一同は越後屋を後にし、壬生にある屯所になつてゐるハ木邸に歩き
だしていた。

三条通りにある越後屋から壬生までは四条通りまで下がり、後は四
条通りを西へ真直ぐ進んで、歩いて半時もかかるないぐらこの距離

である。

「・・・・・ 慶四郎が京にいたとはなあ・・・・立派になりやがつた・・・
・ふつふつ・・・・」
金品を一つも取れずに出てきたのに、芹沢は二三二三笑いながら歩いていた。

新見らはまた 芹沢が強請り失敗に腹立てて、辺りかまわず暴れだすのかとヒヤヒヤしていただが、どうもそれは心配なさそうだった。

「おい、野口 慶四郎の後を付けて、宿泊場所を確認してこ・・・・・」

「わかりました」

野口は芹沢の指示にしたがつてその場からまた越後屋の方向に走りだした。

「しかし、慶四郎様はどうしてあんなに他人行儀に接してきたのでしょうか？芹沢さんとは旧知の仲なのに・・・・」

新見は四条通りに来たあたりで芹沢に尋ねた。

「わからんのか？・・・・」

「・・・・・」

芹沢の声に新見と平山は黙ついた。

「アイツは この顔に免じてお立ち退きを・・・・ と武家言葉で言ったのだ。そういう言葉使ひはじつに時こどいで使うのか？わかるか？」

「ん～・・・　城内とかで格式の高い家柄の方とかと話をする時ですか？」

新見は答えた。

「近いが、少しちがうな・・・公の場で武家同士が話すれば、まあ、あんな口調になる。アイツは武家同士といつ意味でああいう言葉使いをしたのだ」

「なるほど・・・それだけですか？」

「こんどは平山が言った。

「まだ、わからんのか・・・武家同士といつ」とは、身分の高いほうが上である、つまり、アイツは 3 年前に亡くなられた我が大殿 德川斉昭公の右腕とも言われる家老の安島帶刀様の息子として言ったのだ・・・

「・・・？」

新見と平山はまだ理解できなかつた。

「お互い いくら脱藩してるとほいえ、家老の身分の者に頭を下げられて、わしらの様な身分の者が逆らえると思つのか？」

芹沢の家は上級郷士ではあつたが、家老の家いえと比べれば、当然 家老の方が遙かに上である。

「家柄の事を持ち出し、あの場を穩便に済ませようとしたのだ、アイツは・・・」

「相変わらず、慶四郎様 らしいですなあ・・・でも、あの時もし、

刀を抜いていたらどうなったでしょうかね?」

新見は芹沢に尋ねた。

「まちがいなく、斬り合いになつてただろうなあ・・・」

芹沢はニヤニヤしている。

「え?まさか・・・」

「お前も本当にわからんヤツだなあ、あの時に慶四郎の剣氣^{けいき}がわからんかったのか?アイツは本氣だつたぞ」

新見も平山も慶四郎の剣の腕前は十分わかつていたので、悪寒が走る思いがした。

芹沢と慶四郎 その参

芹沢と慶四郎の出会いは、この時より約10年も前にさかのぼる。丁度、ペリーが浦賀沖に現れて日本中、大騒ぎになるほんの少し前である。

水戸の北方に松井村といつところがあった、そこに笠川という川があつた、川はそんなに大きな川ではなかつたが、毎年 雨季になると氾濫し、村の農作物の被害は甚大なものであつた。

その頃 芹沢はこの土地におり、 芹沢 鴨 ではなく養子に出され 下村 繼司 と名乗つていた。

ある日の晝過ぎ、継司が剣術の稽古の帰り道この笠川の橋に通りかかつた時、馬と少年を見つけた。

その少年は馬の手綱を持ち、橋の上から南の河口の方角を遠く見つめていた。

まだ初夏というには早い季節で、少年はどちらかと貧乏くさい黒っぽい綿の着物にボロの袴を履き、足は草履ぞうりではなく草鞋わらじで、腰には刀ではなく、木刀を挿していた、歳のころなら14歳ぐらいであろうか。

継司は この辺りでは見かけない変な井出達の不審者と思い、難癖なんくせをつけた馬を奪い取つたと考え、声をかけた。

「おい、そここの小僧、どつから来た?」

「あ、すみません、水戸の城下から来ました……この先の丁度、川が曲がってる所で雨季の頃によく氾濫するのですか？」

少年は軽く会釈をして、遠くを指さし継司に尋ねた。

川の曲がった内側は綺麗に田畠があるのに外側の広大な土地は湿地ぽくなつていて雑草が生えていた。

「ああ、そうだ、あの辺りは見ての通り毎年の川の氾濫で農作物も育たない、今年も氾濫してあの様だ！小僧、それを聞いてどうしようつて言つのだ？」

「いえ、あの辺りを治水して、川の氾濫を食い止めれば農作物も育ち、我が藩の石高も少しは上がると思い下見に來きました」

「あはあは～驚いた！お前見たいなヤツから 我が藩 などと言ふ言葉を聞くとは！・・・」

継司は大声で笑つた。

少年は何故笑われているか理解できぬ様子で継司を見ていた。

「大体なんだ、その腰の木刀は？侍きどりか？小僧？！」

「ああ、私は侍ですよ、それえにこの木刀の中には鉄の棒が入つてまして、いわば護身用といいますか・・・」

少年は腰に挿した木刀を抜き答えた。

「嘘つけ！城下のどこにお前の様な みすぼらしい侍のいる御家中があるのだ？！ その後の馬もどこかで盗んでんきたのであるづー！」

完全にこの少年を盗人と決めつけた言い方であった。

「いや　いや　私は安島帶刀の二男　安島慶四郎と申す者です」

「おのれ・・・盗人の分際で家老の名を出すとは！　無礼千万！！
性根を叩き直してやるわ！」

と言つと継司は少年に向かつて殴りかかつた。
この頃からすでに　芹沢はなんでも腕つ節で解決しようといつ乱暴
者であった。

少年は咄嗟とっさに木刀を構え、殴りに来た継司の拳を下から木刀で止め、
次の瞬間　胴を打つた。

継司は橋の板場に倒れこんだ。

一瞬の出来事で、倒れた継司は何が起こったか、理解できなかた、
ただ、腹に激痛が走つてゐる。

「大丈夫ですか？」

少年は継司に向かつて手を差し伸べた。

「つるさい！！もう　我慢ならん！！」

継司は少年の手を払いのけて、立ち上がり、腹の痛みを我慢し、腰
の刀を抜いた。

「刀をぬくとは・・・大人げない・・・」

少年は真剣を目の前で見ても別段たじろく事もなく、ヤレヤレと呆あきれた様に言つた。

その態度を見た継司は余計に頭に血が上り

「盗人が何を言つ、叩き斬つてくれるわ！」

と言つと刀を上段の構えから振りかぶり、一気に少年に向かつて振り下ろした。

「どうや—————！」

少年は振り下ろされた刀より更に速く継司の懷に入り、また胴を打つた。継司の腹にさきほどより更深に激痛が走り、また、橋の板場に倒れた。

今度は声も出ない・・・

なんという速さだ・・・ 継司は腹の痛みに耐えながら少年の剣の速さに驚いた。

「無礼者！——拙者を安島刀帯が三男 安島慶四郎義光あじまけいしやうよしみつと知つての狼藉か！！」

薄れゆく意識の仲で継司はその声を聞いた。

継司はそういえば、家老安島刀帯の三人の息子の中に剣の天才と言われる者がいる事を思いだした。

そして、意識を失つた・・・

芹沢と慶四郎　その四

継司はゆっくり進んでいる馬上で目が覚めた。

顔に馬のたてがみが当たつてむづかしい、馬上に座つて、頭を馬の首の方につづつ伏せで寝そべつた格好になっていた。

どうして馬上で座つているのか理解できない・・・

継司が馬に乗り、少年が馬を引いている格好になっている。

「お、田覚められましたか？」

馬を引いていた少年が継司に気がついた。

継司はわざわざのこの少年との対決を思いだした、まだ腹の辺りが痛む。

「しかし、この辺りはのどかで、いいところですね、あの辺りは何を作つてこるのでしょう？」

さきほどの事がなかつたかの様に向こうに見える畑を指さし、少年は言った。

馬はゆっくり足を進めていた。

馬の上で、この少年が本当に家老の息子であれば、大変な事だ・・・
継司はどうしたものかと、思つたが意を決して口を開いた。

「あの〜 貴方様は本当に家老安島様のご子息ですか?」
わざわざ明らかに違う態度で恐る恐る継司は尋ねた。

「まだ、疑つているですか……貴方の座つているそこの鞍に家紋が入つてゐるでしょう」

少年は少し微笑みながら話した。

その様子を見て内心、継司はほつとした。（怒つてはなさそうだ……）

継司は座つている鞍の縁^{へり}の辺りを探した……その縁の中心に安島家の家紋である松の葉の御紋があつた。

継司は驚き、馬から飛び降り……といつより、腹の痛みで上手く降りれず、転げ落ちた格好になつた。

そのまま、正座し、両手を地面に付け、頭を擦り付けるほど、平服した。

腹の痛みは激しいがそんな事を言ひてる場合ではない、下手すれば、打ち首である。

武士にとつて打ち首^{ほど}、不名誉な事はない。

「これはとんだ御無礼を……どうか^い容赦^{ゆる}ください……」

頭を地面に付けながら、継司は言つた。

「いやいや、私がこんな汚い格好をしているから、そなたに勘違いさせてしましました、我が父は元々下級武士出身 大殿様に見いだされて今のお老の職に付きました。まあ、僕約質素が我が家のお訓でござりますいんな格好です、わたくし、頭をお上げください」

「いやいや、拙者、腹かつ切つてお詫びいたします……」

継司はもう肌になり、腰から脇太刀を取り出した。

「それはなんん！」

素早く少年の木刀がまたもや、継司の手を叩きつけた。

脇太刀が弧を描き地面に落ちた。

「ああ、すみません、つい手が出てしました、御許しください」

「ぐうう・・・」

継司は両手を腹の辺りで抑え痛みに耐えていた。

「では、こうしましよう・・・明日からあの笈川は治水工事に入ります、本格的には十日後からで人手がいるんです、十日後までにできるだけ沢山の人を集めてください・・・それから貴方を私の補佐にいたします、治水工事を私と共にやっていただきます、これでどうですか？」

「わかりました、仰る通りに・・・」

継司は早くこの場から逃げたくなった、自分は因縁を付けた少年にまったく歯が立たないのである、しかも家老の息子である。

「では、人を集めの人に人足代として一人一日の給金は500文と
いうことで集めてください」

この村で現金を得ようとすると、村で採れた野菜などを城下に売り歩くしかないのだが、一口売り歩いても、10文ほどしかならない、その50倍の賃金である。継司は驚いた。

(「これなら、村の衆も喜んでこの治水工事を手伝ってくれるだろう」)

「はつはー」

継司は平服している。

「まあまあ、そんな事はもづやうりすとも、御手を上げてください」
少年は困りはてた、継司が動かず平服しているのである。

少年はじばりへ、じうしたものかと考えた・・・

「あの～ 貴方は今から工事の終わるまで、私の家来扱いでよろしいですか？」

「はつはー」

継司は変わらず平服している。

「では・・・」

少年は大きく息を吸いこんでから

「これは主命である！そのほつ、今すぐ立ちあがれい！！！」

主命それは、武士にとつて絶対命令なのである、この命令に背く事は藩に背く事になり、大罪である。

少年はこの様な命令は出したくなかったが、仕方がない・・・いつもでもしないとこの男は動かないと思つたのだ。

「はつはー！」

継司はすぐに反応し立ちあがつた。

なんという美声である！少年の命令する口調は、心の底から鼓舞が起こり、己を凜とさせるのである、つい体が反応する・・・間違えなく人の上に付く人間だ、と継司は思つた。

「さあ、まだ、腹の辺りが痛むでしょ？、気になさうす、馬に乗つ

てください」

少年は優しく継司に声を掛けた。

「いえ、そんな事はできません・・・私はこのまま歩いて帰ります
ゆえ・・・」

「私は十日後に貴方の元気な姿を見たいのです、一緒に元気よく働きましょう、このまま返すと申し訳ない、どうぞ、馬に乗ってください」

「いやいや、それはなりません・・・」

何回が、こんな押し問答があり、継司はついに根負けして、馬に乗つた。

また、継司が馬に乗り、少年が馬を引いている格好になつてた、一見すると、少年が継司の家来に見える。

「下村継司さん・・・貴方の家の方向はこの道を真直ぐでいいのですね？」

手綱を持つた少年が馬上の継司を見上げて言った。

「そうです、この道を真直ぐいった、あの林の向こう側です・・・
はて？私は安島様に名を名乗った事がないのに、何故・・・私の名前を御存じなのでしょうか？」

継司の言つ通りであつた、このふたりが出会つてから、まだ、継司はちゃんと自己紹介はしていないのだ。

「あはは・・・」

少年はニコニコ笑いながら、馬を引き歩きだした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7282g/>

疾風の剣

2010年10月10日21時03分発行